

[研究ノート]

## ナイジェリア進歩同盟

落合 雄彦\*

### The Nigerian Progress Union

Takehiko OCHIAI

The Nigerian Progress Union was founded by Nigerian students in London in 1924 “to raise in Nigeria and elsewhere a fund for definite educational purposes chief among which are: scholarships for Nigerian youths; the maintenance and multiplication of schools in Nigeria; the foundation of a hostel in London for African students; and the promotion of research into West African laws, customs and institutions.” The NPU has been paid little scholarly attention, because it was short-lived and small in scale. However, the NPU was a prototype of the West African Students’ Union (WASU), which was founded in 1925 and greatly contributed to the promotion of nationalism and pan-Africanism in West Africa, so more scholarly attention should be paid to the forerunner of the WASU. The aim of this article is to examine the activities of the NPU through mainly analyzing the minute book of the union, which

---

\* おちあい・たけひこ：敬愛大学国際学部専任講師 アフリカ政治

Lecturer of African Politics, Faculty of International Studies, Keiai University.

is kept in the Solanke Collection, Gandhi Library, at the University of Lagos.

## はじめに

ナイジェリア進歩同盟 (Nigerian Progress Union: NPU) は、1924年7月にラディポ・ソランケ (Ladipo Solanke) を始めとする在英ナイジェリア人学生によってロンドンで創設された組織である。約1年後の25年8月にやはりソランケのイニシャティブによって創設された西アフリカ学生同盟 (West African Students' Union: WASU) が、その後300名もの会員を擁する大規模なアフリカ人学生組織にまで成長し、第2次世界大戦をはさんで30年以上の長きにわたって活動を続け、一学生組織としての枠組みをはるかに超えてアフリカのナショナリズム期における政治意識の形成と発展に重要な歴史的役割を果たしたのに対して、NPU は短命かつ小規模な在英ナイジェリア人サークルに留まり、在英アフリカ人の歴史にその名を刻むような特筆すべき活動を展開することはなかった。このため、NPU に関する研究は、これまで WASU のそれと比して極めて限定的なものに留まってきたといえる<sup>(1)</sup>。しかし、NPU と WASU は、前者がナイジェリア人、後者がナイジェリア人を含む西アフリカ人学生を対象とする一応別個の組織ではあったが、両組織はいずれもソランケのイニシャティブによって創設され、その目的、活動、会員についても重複する部分が多くみられるなど明らかに密接な関連性を有していた。やや木目の粗い言い方をするならば、WASU 発足の前年に創設された NPU は、WASU の事実上の前身あるいは原型であったといえよう。そして、NPU の活動を考察する試みは、WASU の活動の性質と軌跡を理解する上での極めて重要な作業となる。

ところで、筆者は、1995年8-9月、97年12月、98年9月の3度にわたってナイジェリアを訪問し、ラゴス大学ガンジー図書館に所蔵されている「ソランケ・コレクション」の調査を実施した。「ソランケ・コレクション」とは、ソランケの死後、彼の妻がソランケの日記、書簡、蔵書、写真などをラゴス大学ガンジー図書館に寄贈して創設された個人コレクションであ

る。筆者は、もともと WASU 研究の一次資料を収集するために同コレクションの調査を実施したのであるが、その過程で同コレクション内に NPU 議事録を偶然「発見」した。「ナイジェリア人学生による会議が、ナイジェリアの福利一般の増進を目指す同盟を創設するために、ラディボ・ソランケ氏の招請のもと F・オラ・ヴィンセント (F. Ola Vincent) 氏の所 (5 Lancaster Road, W.11) で開催された」<sup>(2)</sup> という書き出しで始まる同議事録は、NPU が創設された24年7月17日から WASU 創設前夜の25年6月8日までの11ヵ月間にわたる NPU 内の議事審議内容を記録したものである。同議事録は、ノートに手書きされたわずか44ページの文書にすぎないが、NPU の活動を知る上での極めて貴重な内部文書といえよう。

本稿の目的は、筆者が「ソランケ・コレクション」調査の過程で収集した NPU 議事録を基に、WASU の前身あるいは原型としての NPU の組織と活動を解明していくことにある。

## 1. 創 設

先に引用した議事録の冒頭箇所が示すとおり、NPU の創設において重要な役割を果たしたのはソランケであった。

ソランケは、1886年 (あるいは85年)、ナイジェリア南西部の町アベオクタの郊外にあるオフアダという村で占い師の家系に生まれた。アベオクタやオヨといった町で初等・中等教育を受けたのち、シエラレオネのフリータウンにあるフーラー・ベイ・コレッジに学び、さらに1922年、法学を修めるために渡英し、ロンドン大学ユニバーシティ・コレッジに入学している<sup>(3)</sup>。

渡英後のソランケが一体いつ頃から NPU のような新たな在英アフリカ人組織の創設を模索し始めていたのか、その時期を厳密に特定することは難しい。しかし、少なくとも NPU 創設より1年以上も前の1923年3月13日にソランケが書き記したメモのなかに、すでに彼がなんらかの在英アフリカ人組織の創設に関心を抱き始めていた事実を読み取ることができる。その1枚のメモ書きには、次のような記述がみられる。「その組織の名称

は、『エグベ・アロ』(Egbe Aro)あるいは『キテティエミ』(Kiteteyemi クラブ)とし、「それは、よく鍛練され、愛国心に満ちた人々によって構成される」<sup>(4)</sup>。ヨルバ語を解さない筆者には、残念ながら「エグベ・アロ」あるいは「キテティエミ」というヨルバ語の名称の意味が十分には理解できないが、『現代ヨルバ語辞典』によれば、少なくとも「エグベ」(egbe)とはヨルバ語で club、society、association 等を意味する言葉であり<sup>(5)</sup>、一方、ソランケがメモに書き記している説明によれば、「アロ」(aro)とは「アワドゥロ」(awaduro)あるいは「アワロ」(awaro)というヨルバ語の語義を含意しており、それは「統一して立ち上がる」という意味を有しているという<sup>(6)</sup>。すなわち、少なくとも前者の「エグベ・アロ」という名称には、「統一して立ち上がる(者の)会」といった意味合いが込められていたであろう。

いずれにせよ、少なくとも同資料からは、ソランケが渡英の翌年にあたる1923年前半の時点で早くも NPU あるいはそれに準じたなんらかの新しい組織の創設を構想し始めていたことが理解されるであろう。

なお、ソランケが前述のメモを書き記した2日後の1923年3月15日、バイアス(F. O. O. Byass)というナイジェリア人留学生がソランケに宛てて1通の書簡を書き送っている。そのなかでバイアスは、ソランケに対して、「数日前に君に相談した件について、今度の土曜日の午後2時に上記の住所(17a Comeragh Road, W14 London)で非公式の会合を持つことが決まった。……君が出席してくれることを期待する」<sup>(7)</sup>と告げている。果たしてソランケがこの招きに応じて同会合に出席したのか否かは明らかではないが、おそらく時期的にみて、同会合はソランケがメモに記していた新たなアフリカ人組織の創設について話し合うためのものであったと考えられる。

1924年7月17日、ソランケの呼びかけに応じて彼自身を含む13人のナイジェリア人学生<sup>(8)</sup>がヴィンセントという学生の部屋に集まり、その場でナイジェリアの福利増進を目的とした新たな組織の創設が決議された。議事録によると、その創設会議の際、エクンダヨ・ウィリアムズ(Ekundayo Williams)という学生が、学生以外のナイジェリア人の加入を排除するた

めに、新しく創設される組織の名称をナイジェリア学生同盟 (Nigerian Students Union) とすべきであると提案した。しかし、話し合いの結果、入会資格は必ずしも学生に限定せず、同盟の目的に賛同するすべてのナイジェリア人に開放することが合意され、結局アジャイ・ジョンソン (Ajayi Johnson) が提案したナイジェリア進歩同盟という名称が採用されることとなった。また、同会議では、ソランケが暫定的に名誉書記に選出されたほか、同盟の規約草案づくりをウィリアムズ、D・エシン (D. Esin)、ジブリル・マーティンス (Jibril Martins)、ソランケの4名に委ねることが決議された<sup>(9)</sup>。

創設会議から10日後の1924年7月26日、NPUの第2回会議が開催された。同会議では、同盟の規約草案が起草メンバーから提出され、審議・採択された。そこで採択された規約によると、NPUの目的とは、「明確に教育的な目的のための資金をナイジェリアとその他の地域において確保すること」であり、①能力あるナイジェリア人青年すべてに対して開かれた多様な奨学金、②ナイジェリアにおける学校の維持と拡大、③ロンドンにおいて大いに必要とされている、すべてのアフリカ人学生のためのホステルの設立、④西アフリカの法、慣習、制度に関する研究の振興、という4項目が、そうした資金の主要な使途とされた<sup>(10)</sup>。

こうした「教育的な使途のための資金を確保する」という、NPUの実に簡潔明瞭な目的のなかには、しばしば新たな在英アフリカ人組織が創設され、その目的が成文化される際にみられるような高邁な理想や精神的な気負いといったものが微塵も感じられない。それどころか、奨学金やホステルの設立のための資金を確保するという、かなり個別具体的なNPUの目的からは、同組織が単に資金集めを行うだけの団体にすぎなかったのではないか、といった印象さえ受けかねないのである。後述するとおり、その後NPUが在英ナイジェリア人学生の間で勉強会や講演会を積極的に企画運営するなど、単なる資金集めの団体以上の諸活動を展開するようになったことを想起すれば、NPUが資金集めをその創設時の唯一の目的としていたことにはやや違和感が感じられる。一体なぜNPUは教育振興のため

の資金確保をその唯一の目的としたのであろうか。そしてそこには、一体いかなる意味合いが込められていたのであろうか。

おそらく NPU の目的は、イギリスにおいて高等教育を享受していた当時の在英ナイジェリア人学生たちが、その少数エリートとしての特権的な地位に甘んじることなく、率先して後進のナイジェリア人青少年の教育振興のために尽力しようとする、彼らなりの決意の表明であったのではなからうか。そしてそこには、アフリカ人が進歩する上での教育の重要性和そのためにアフリカ人が自助努力することの必要性を強く説いていたソランケの思想的影響が容易に看取される。また、NPU が美辞麗句や大言壮語よりも資金の確保という実に具体的な目的を掲げた背景には、抽象的な理想を語ることよりもむしろ具体的な活動を実践することに価値を置くソランケの質実な人間性が少なからず影響を与えていたように思われる<sup>(11)</sup>。

なお、その後 WASU を自らのイニシャティブによって創設し、やはり NPU の場合と同様にその書記に就任したソランケは、NPU の目的のなかにも含まれていた、アフリカ人学生のためのホステル（クラブ・ハウスを兼ねた学生の宿泊施設）の設立という項目を WASU の目的の 1 つとしても掲げ、実際に数年後には、その実現のために WASU 代表として単身で英領西アフリカ各地を訪問し、3 年間にわたって広範な募金活動を展開している。このように、ロンドンにおけるアフリカ人学生ホステル開設のための資金確保という、NPU と WASU に共通した目的をソランケは身をもって実行したわけであり、こうした事実からも、両組織の目的とソランケ個人の信念との間の密接な連関と一貫性が容易に理解されよう。

また、NPU は、こうした目的のほかにその基本方針として、①健全な道徳規律の教練と振興、②統一と協調の精神の振興、③ナイジェリア人学生一般の利益の促進、④自助、自己犠牲、自己管理、自学の習慣の育成、⑤ナイジェリアの一般的な福利の振興、⑥祖国と人種のための忠誠と献身の精神と共に義務の高い感覚の教練<sup>(12)</sup>という 6 つの項目を掲げていた。そして、目的の場合と同様、こうした NPU の基本方針、特に②や④のなかにも、ソランケの思想的影響が明らかに看取されるのであり、特にそれ

らは、「自助、統一、協力」というその後の WASU の3つの活動理念のなかにも継承されることとなった<sup>(13)</sup>。

なお、第2回会議では役員選出が行われ、代表にエシン、副代表にオラウォレ・ルーカス (Olawole Lucas)、会計にヴィンセント、書記にソランケがそれぞれ選ばれた。また、執行委員会のメンバーには、代表、副代表、会計、書記のほかに、ジョンソン、バイアス、ソリノラ・シフル (Sorinola Siffre)、マーティンスの4名が選出されている<sup>(14)</sup>。

## 2. パトロン

当時の在英アフリカ人組織には、イギリスの他の社会団体と同様、パトロンをもつ慣習が広くみられた。

NPU は、1924年7月26日の会議でパトロンの人選について話し合い、その結果、ナイジェリア人元官吏であったヘンリー・カー (Henry Carr)、ラゴスにある立法審議会のメンバーであったアデニイ・ジョーンズ (Adeniyi Jones)、ナイジェリア南東部の町カラバーの首長であったリチャード・ヘンショウあるいはヒューショウ (Richard Henshow or Heushow) の3名に名誉パトロンへの就任を依頼することが決議された<sup>(15)</sup>。

このほか、NPU は、1924年8月2日の会議で、著名なパン・アフリカニストであるマーカス・ガーヴィー (Marcus Garvey) の妻であり、当時ロンドンに滞在していたアミー・アシュウッド・ガーヴィー (Amy Ashwood Garvey) に対して、もともとはヨルバ社会で優れた女性に与えられていたイヤロデ (Iyalode) という称号を正式に贈ることを決議している<sup>(16)</sup>。

ガーヴィー夫人は、NPU 創設当初にその活動に積極的に協力した人物である。同夫人が NPU との関わりをもつようになったのは、やはりソランケを介してであったと思われる。ソランケの当時の日記には、ガーヴィー夫人と面識をもつようになった経緯がごく短く走り書きされている。それによると、ガーヴィー夫人とソランケの交友は、NPU 創設の4ヵ月程前の1924年3月、ガーヴィー夫人が『ウェスト・アフリカ』誌に掲載されたソランケの記事を読み、彼に賛辞の手紙を送ってきたことに始まるという。

その後、両者の間では面識もないまま数回の手紙のやり取りが行われたが、24年4月2日になってソランケがガーヴィー夫人の招きで彼女を訪れ、面会したのであった<sup>(17)</sup>。そして、NPU 創設直後の24年7月22日、ガーヴィー夫人は NPU の6名のメンバーと非公式に会合をもち、その場でナイジェリア人のための教育プログラムを創設したいとの意向を表明し、NPU の協力を求めたのである。ガーヴィー夫人が提唱した教育プログラムとは、ナイジェリアの人々の教育向上に資する不偏不党的でナイジェリア人自身が運営管理する新しいスキームとされ、その活動資金はガーヴィー夫人がアメリカで集めるものとされた。NPU は、24年7月26日の会議でこのガーヴィー夫人の提案への対応を協議し、同プログラムに全面的に協力することを決議している<sup>(18)</sup>。

1924年8月31日、NPU はアメリカへと帰国するガーヴィー夫人のための送別会を開催した。その席上、ソランケは彼自身がガーヴィー夫人と面識をもつにいたった経緯やガーヴィー夫人が NPU 創設の上で果たした重要な役割について出席者に語ったという。また、送別会の後、NPU メンバーとガーヴィー夫人の間で非公式の会合がもたれ、ガーヴィー夫人によるアメリカでの資金集めの方法やそれへの NPU 側の協力方法等が話し合われた<sup>(19)</sup>。しかし、ガーヴィー夫人が同年9月に渡米後しばらくの間は同夫人と NPU の間で連絡が交わされていたものの、やがてナイジェリアの教育プログラムをめぐる両者の協力関係は途絶えてしまうことになる。その原因は定かではないが、約10年後の34年3月28日に当時アメリカにいたガーヴィー夫人がロンドンで WASU ホステルの寮長をしていたソランケに宛てて記した1通の書簡には、その原因を推察するための手がかりとなる箇所がみられる。同書簡のなかで、ガーヴィー夫人は、ソランケが同夫人に対して極めて冷淡な態度を示してきたこと、その背景にはソランケが同夫人と不仲な夫ガーヴィーと交友関係を結ぶようになったことがあったのではないかと考えていることを述べた上で、たとえそうであっても、自分はソランケに対する友情の想いをこれまでも常に抱いてきたし、またアフリカに対して奉仕しようとする彼女の情熱は24年当時よりも一層高まっ



ていると語っている<sup>(20)</sup>。NPU が比較的短命に終わったことに加えて、ソランケとガーヴィー夫人の個人的関係が陰悪なものになっていったことが、NPU とガーヴィー夫人の協力関係が途絶えた直接あるいは間接の原因であったのかもしれない。

### 3. 活 動

それでは、NPU の具体的な活動とは一体どのようなものであったか。当時の『ウェスト・アフリカ』誌には、NPU の活動について報じた記事がいくつか掲載されている。それによれば、例えば、NPU はロンドン大学法学部ディベート協会の模擬裁判や討論会に参加したり<sup>(21)</sup>、同大学ユニバーシティ・コレッジの比較法学の教授であったド・モントモレンシー教授 (Prof. J. E. G. de Montmorency) を講演者としてしばしば招き、「黒人種のヒューマニズムの重要性」、「西アフリカの教育」、「民族的な自助」といった諸テーマに関する講演会を開催している。さらに、NPU は同教授の講演の一部を印刷し、そのパンフレットを販売するといった活動も行っていた<sup>(22)</sup>。また、イギリス植民地省の内部資料によれば、1924年に NPU は当時ナイジェリア総督の要職にあったヒュー・クリフォード (Hugh Clifford) を招いて講演会を開催している<sup>(23)</sup>。このほか、NPU は活動資金を得るために各会員の英国留学体験記をパンフレットの形式で出版することや<sup>(24)</sup>、結局実現しなかったものの、独自の機関誌を発行することなどを検討していたようである<sup>(25)</sup>。

こうした諸活動を支えていた NPU の会員数は、1925年10月の時点で約30名ほどであり、そのうち約20名がロンドンに在住し、その他はブリストル、バーミンガム、エジンバラなどの地方都市に居住していた<sup>(26)</sup>。

### 4. 植民地省との関係

NPU の存在が在英アフリカ人学生担当官庁であった植民地省に初めて認知されたのは、おそらく NPU からの抗議文書が植民地省宛てに送付されてきた1924年10月のことであったと思われる。同年9月、NPU は、当

時ロンドンを訪問中であった、ナイジェリア北部の町カッチーナのエミール（イスラーム土侯）を歓迎するためにエミールの宿泊先ホテルでレセプションを設けようとしたが、通訳としてエミールに同行していたナイジェリア政府官吏によって2度にわたってレセプション開催を妨害されるという事件が起きた。そして、これに抗議してソランケは、同年10月13日、NPU を代表して植民地省に宛てて書簡を送付し、同官吏の言動を厳しく非難するとともに、同官吏からの釈明を要求した<sup>(27)</sup>。これに対して、植民地省は同年10月31日付で NPU に対して書簡を送付し、事件に関する同官吏からの説明を伝達してきたが、NPU 側はこの説明に納得せず、ソランケが同年11月8日に再度植民地省に対して抗議の書簡を送付している<sup>(28)</sup>。

しかし、植民地省と NPU の間でこうした書簡のやり取りこそみられたものの、植民地省は当初 NPU の組織としての性格や活動をほとんど把握してはいなかった。その状況はロンドン大学当局側も同様であったと思われる。例えば、NPU 創設から1年を経た1925年7月に同大学ユニバーシティ・コレッジ当局者が植民地省に宛てた書簡によれば、大学当局は、NPU をおおむね有益な組織と認識しつつも、同組織がナイジェリア人学生による政治活動のための偽装組織である危険性も完全には否定できないとして、植民地省の見解を求めている<sup>(29)</sup>。これに対して、同書簡を受け取った植民地省側も、カッチーナのエミール事件を通して少なくとも NPU とその書記であるソランケの存在については認知していたものの、NPU 自体の具体的な活動についてはほとんど何も情報を有してはおらず、同大学への返信の必要性から、NPU で講演した経験をもつクリフォードに対して急いでその情報提供を求めるような状況であった<sup>(30)</sup>。

しかし、その後25年10月になって、植民地省は同省次官と NPU 関係者の会見の場を設けている。そして、その席上、NPU の名誉書記であったソランケが、NPU の規模や活動を植民地省当局に対して口頭で詳しく説明し、同組織に対する政府の理解と協力を求めたのであった<sup>(31)</sup>。こうしたプロセスを経ながら、次第に植民地省は、ソランケや NPU に加えて、当時の在英アフリカ人学生の間にもみられた確かな組織化の動きについて、

その認識を次第に深めていったものと考えられる。

## むすびに

1925年8月7日、ロンドンのソランケの自宅にナイジェリア、ゴールドコースト（現ガーナ）、シエラレオネ、ガンビアの4つの英領西アフリカ植民地出身の学生21名が集まった。当時のロンドンには、NPU のほかに、アフリカ系人学生同盟（Union of [for] Students of African Descent）、アフリカ進歩同盟（African Progress Union）、ゴールドコースト学生協会（Gold Coast Students' Association）という少なくとも4つのアフリカ系人組織が存在していたが、そこに集まった学生たちの多くは、特に西アフリカの問題を討議し、西アフリカの一体性の意識を涵養するような学生同盟の創設が必要であるという認識に達し、西アフリカ人学生を対象とした WASU という新たな組織の創設を決議したのである<sup>(32)</sup>。

NPU は、WASU 創設後もしばらくの間は存続した。しかし、前述したとおり、ソランケのイニシャティブによって創設された両組織の目的、活動、会員には重複する部分が多く、また両組織の書記を兼務していたソランケが WASU を明らかに重視していったこともあって、その後 NPU は1920年代末までに衰退し、やがて消滅していったものと考えられる。

### 〔付記〕

本稿は、文部省科学研究費補助金（奨励研究（A））（研究課題：「ナショナリズム期におけるアフリカ人学生組織の政治活動に関する研究」）による研究成果の一部である。

### （注）

- (1) これまでの NPU に関する研究成果としては、わずかではあるが、例えば Hakim Adi, “West African Students and West African Nationalism in Britain 1900-60,” Ph.D. thesis, University of London, School of Oriental and African Studies, 1994; 落合雄彦「西アフリカ学生同盟の創設（1925年）前夜の在英アフリカ系人学生諸組織」『アフリカ研究』第52号、1998年3月、67-76ページ等がある。
- (2) The Nigerian Progress Union, *The Minute Book*, 17 July 1924, SOL Box 78. なお、SOL という略称は、ラゴス大学ガンジー図書館に所蔵されている「ソランケ・コレクション」を示す。
- (3) 幼少期から青年期のソランケについては、落合雄彦「青年ラディボ・ソランケ——その

- 生い立ちから西アフリカ学生同盟の創設に至るまでの軌跡」『法学研究』（慶應義塾大学）第71巻第1号、1998年1月、347-367ページを参照されたい。
- (4) Ladipo Solanke, *Diary, Note, Memo, etc.: Private and Confidential (1920)*, SOL Box 34.
  - (5) R. C. Abraham, *Dictionary of Modern Yoruba*, London: University of London Press, 1958 (second impression 1970), p.178.
  - (6) Solanke, *Diary, Note, Memo, etc.*
  - (7) F. O. O. Byass to Ladipo Solanke, 15 March 1923, SOL Box 34.
  - (8) 13人のNPU創設メンバーは以下のとおり。Ekundayo Williams, G. Rufino, D. Esin, Ajayi Johnson, O. Vincent, Jibril Martins, Ernest Goyea, J. J. Martins, Olawole Lucas, A. Pedro, S. Siffre, Omosanya Adefolu, and Ladipo Solanke (NPU, *The Minute Book*, 17 July 1924).
  - (9) *Ibid.*
  - (10) The Nigerian Progress Union, *The Constitution of the Nigerian Progress Union*, 26 July 1924, PRO CO 583/138. なお、PRO という略称はロンドン郊外のキューガーデنزにある the Public Record Office (英国公文書館)、CO は the Colonial Office (植民地省) を示す。
  - (11) 前述したソランケのメモ（1923年3月13日付）にも、「この協会は語ること少なく、しかし、大いに行動する」と記されている（Solanke, *Diary, Note, Memo, etc.*）。
  - (12) NPU, *The Constitution*.
  - (13) WASU の活動の理念と目的については、落合雄彦「西アフリカ学生同盟とラディポ・ソランケ」、小田英郎編『アフリカ その政治と文化』所収、慶應通信、1993年、360ページを参照されたい。
  - (14) NPU, *The Minute Book*, 26 July 1924.
  - (15) *Ibid.*
  - (16) NPU, *The Minute Book*, 2 August 1924.
  - (17) Solanke, *Diary, Note, Memo, etc.*
  - (18) NPU, *The Minute Book*, 26 July 1924.
  - (19) *Ibid.*, 31 August 1924.
  - (20) Amy Ashwood Garvey to Ladipo Solanke, 28 March 1934, SOL Box 2.
  - (21) *West Africa*, 28 February 1925, p.167.
  - (22) *Ibid.*, 7 March 1925, p.178; *ibid.*, 8 August 1925, p. 985; *ibid.*, 13 March 1926, p. 279.
  - (23) Hugh Clifford to Harding, the Colonial Office, 1 August 1925, PRO CO 583/138.
  - (24) NPU, *The Minute Book*, 13 December 1924.
  - (25) *Ibid.*, 11 October 1924.
  - (26) Adi, “West African Students and West African Nationalism in Britain 1900-60,” p. 46.
  - (27) Ladipo Solanke to the Secretary of State for the Colonies, 13 October 1924, PRO CO 583/131.
  - (28) Ladipo Solanke to the Under Secretary of State for the Colonies, 8 November 1924, PRO CO 583/131.
  - (29) Secretary of University College to the Under Secretary of State for the Colonies, 16 July 1925, PRO CO 583/138.
  - (30) Harding, the Colonial Office, to Hugh Clifford, 31 July 1925, PRO CO 583/138.
  - (31) Ladipo Solanke to the Under Secretary of State for the Colonies, 5 February 1926, PRO CO 583/138; Adi, “West African Students and West African Nationalism in Britain 1900-60,” p. 46.
  - (32) *West Africa*, 15 August 1925, p.1002.